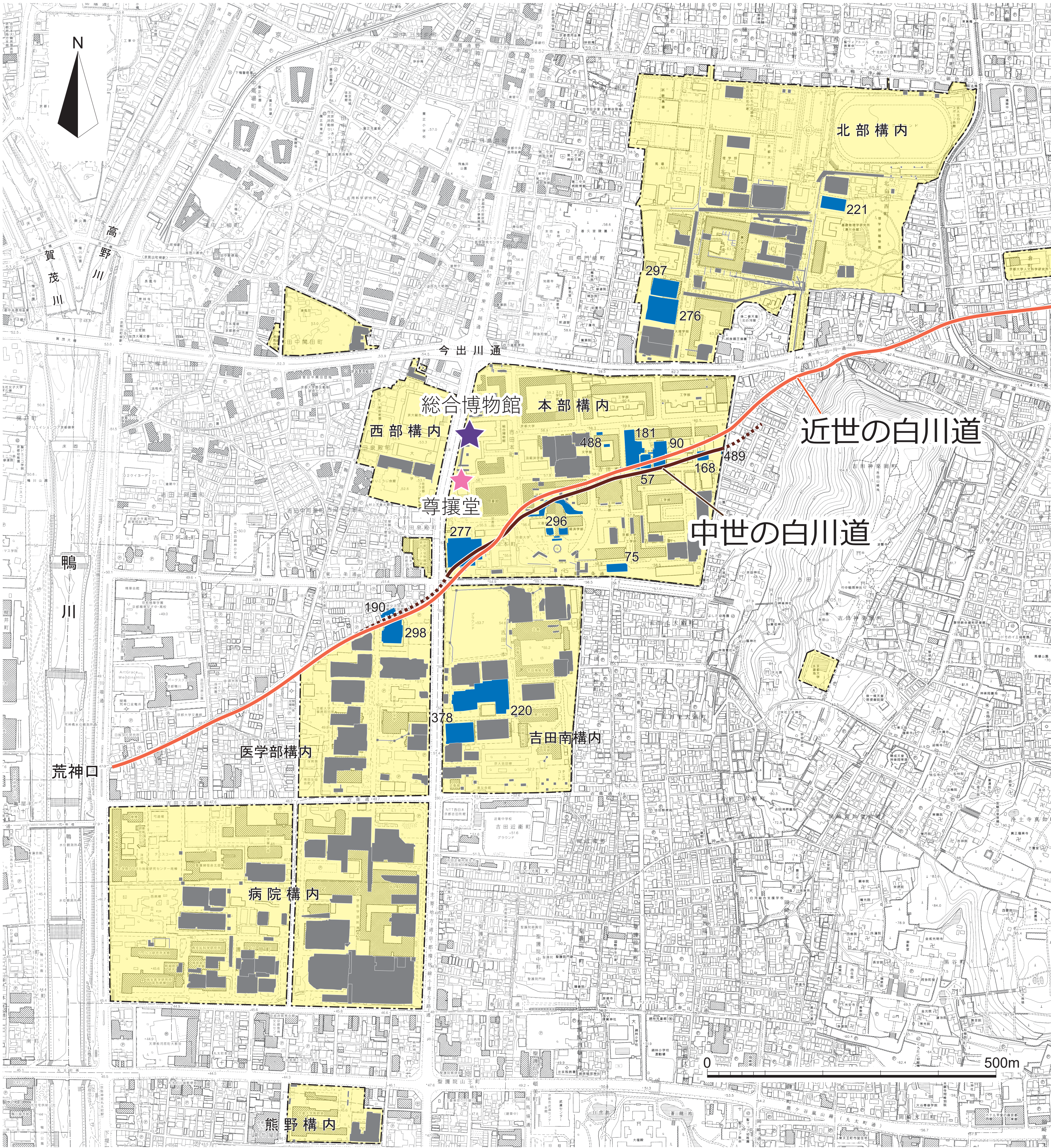


キャンパスの地下に眠る歴史ー京と近江を結んだ古道「白川道」の発掘調査ー

京都大学は遺跡の上にある大学です。縄文時代から1万年余に及ぶ人々の活動の跡が、キャンパスの地下には残されています。
時計台のある本部構内には、かつて古道「白川道」がはしっていました。

＜白川道とは＞
京の荒神口と近江坂本とを結んだ街道で、「志賀の山越え」「志賀越道」「山中越」などとも呼ばれています。琵琶湖の水運で陸揚げされた物資の搬路などとして、京と東国を結ぶ重要な動脈のひとつでした。
1977年、本部構内の校舎建設に先立つ発掘ではじめて遺構が確認され、その後重ねられた調査で、構内の地下に過去の路面が連綿と残されていることがわかりました。



吉田キャンパス発掘調査地点と白川道

＜古代の白川道＞
現在、平安時代より前の時期の道の存在ははっきりしていません。解明は今後の重要な課題ですが、北部構内では、10世紀前半ころの東西方向の路面がみつかっており、「古代の白川道」の候補と考えています。

＜中世の白川道＞
本部構内でみつける白川道は、中央の時計台付近を避けるように北へとゆるやかに蛇行しながら、南西ー北東方向にはしります。12世紀後半まで遡り、15世紀ころまで存続が確認されます。13世紀代を中心に、道周辺で溝や井戸、大量のかわらけなど出土する遺構や遺物が急増し、東国における武士政権成立を背景として、道の整備や周辺の開発が進んだものと思われる。



本部構内でみつけた中世の路面



近世白川道の断面にみる轍（わだち）の重なり

＜近世の白川道＞

江戸時代には中世の道を壊して造り替え、深い轍（わだち）が特徴的です。幾筋も積み重なって路面がかさ上げされています。車輪が走るよう礫や砂で埋めて修復を繰り返した結果で、荷車の激しい往来がしのべられます。また、道沿いに野壺（肥溜め）の桶が並ぶ状況も確認されました。当時、周辺は耕作地が広がっており、必要な有機肥料（肥）も運ばれたのでしょう。なお、江戸時代の道がはっきりしてくるのは、18世紀に入ってからで、16～17世紀代の不詳は今後の検証課題です。

＜白川道と幕末＞

幕末の動乱期、京に集結させた藩士を収容するため、農村であった鴨東に諸藩の藩邸が林立します。尾張藩は1863年に吉田村から屋敷地を購入し、現在の本部構内西半にあたる位置に藩邸を築きました。これにより白川道は寸断されてしまいます。この藩邸は、残されている図によると、四周に堀をめぐらし、馬場や多数の長屋と主殿の屋敷が備わる本格的なものでした。本部構内の発掘では、北辺以外の堀の位置が確認されています。



本部構内東南隅の近世白川道と尾張藩邸期の遺構

＜近代以降の白川道＞

寸断された白川道は、明治以降に藩邸が廃絶しても復活せず、第三高等学校の敷地に取り込まれ、京大本部構内となり現在に至ります。しかし、構内以外では現在もルートをとどめ、他の直線的な街路と異なる古道の雰囲気を感じられます。また、東一条の交差点には江戸時代の道標が、北白川には中世にさかのぼる石仏が置かれるなど、市街地となった界隈で歴史をしのぶことができます。先端的研究が日々進められているキャンパスの足もとや周辺にも、大学や地域にとって貴重な歴史遺産が数多く残されているのです。



a 東一条交差点東北の江戸時代道標



b 北白川西町の道標と石仏



c 北白川西町の道標と石仏



白川道現況
(荒神橋付近・2019年)